

燦めきの日本画 —石崎光瑤と京都の画家たち—



石崎光瑤《燦雨》左隻 南砺市立福光美術館蔵

特別陳列 百工比照 I

特別陳列 高橋介州と 加賀象嵌のあゆみ

■ 石川の文化財

■ 額から出た絵画 台座から降りた彫刻たち

■ 優品選【近現代絵画・彫刻】

- 10月前半の展覧会
- 10月の行事案内・ミュージアムウィーク
- アラカルト ただいま展示中



重文《百工比照》より「蒔絵梨子地塗色類」
前田育徳会蔵



高橋介州《加賀象嵌孔雀香炉》

—石崎光瑠と京都の画家たち—

主催：石川県立美術館、協力：南砺市立福光美術館

後援：北國新聞社、NHK金沢放送局、北陸放送、石川テレビ放送、テレビ金沢、北陸朝日放送

学芸員の眼

当展の名称は「燦めきの日本画」。この読み方について、問合せが時折あります。「きらめきのにほんが」と読むのですが、引つかかるのは「燦」という文字。一般的に「きらめき」には「煌」をあてることが多いようです。「燦」は白い米がきらきらとひかる様子を表しています。展覧会名にこの「燦めき」をあてたのは、もちろん石崎光瑠の代表作《燦雨》(表紙)から。そこに描かれる南国に降り注ぐスコール。さらさら輝く雨には「燦」という文字がよくあいます。少年時代、この絵に衝撃を受けた上村松篁が、五十年の時を経て発表したもうひとつの《燦雨》もこのたび展示します。光瑠、松篁いずれの愛好家も魅了することでしょう。

この秋は近代日本画の名品の数々をご堪能ください。

江戸琳派と京都画壇の流れを汲み、きらめく宝石のような花鳥画をのこした石崎光瑠。明治十七年、富山県福光町(当時)に生まれた石崎光瑠は、江戸琳派の流れを汲む金沢在住の山本光一に十二歳で師事。金沢に居を移し、本格的に日本画の基礎を学びました。十代で北陸をはなれ、二十歳を前に京都の竹内栖鳳に入門。文展、帝展を舞台に《燦雨》《熱国妍春》《白孔雀》など、絢爛たる装飾性と、確かな描写力に裏打ちされた作品世界を発表し、注目される存在となりました。本展では石崎光瑠を軸に、熱気溢れる近代の日本画を紹介します。

まず、第一章「光瑠誕生」では猪四一少年が山本光一に師事し、光瑠として画業をスタートした頃を師山本光一の作品とともに辿ります。光瑠芸術の装飾性は江戸琳派の山本光一無くしては誕生し得なかったことが窺えます。

第二章を「先駆する日本画家たち」として京都の

師竹内栖鳳や、その同世代の画家たちを紹介します。幸野楳嶺門下のうち、四天王を謳われた竹内栖鳳、都路華香、菊池芳文を展観。また今尾景年、山本春拳の優品もご覧ください。

第三章は「躍動する日本画 光瑠の生きた時代」として光瑠の代表作を中心に、西山翠嶂や西村五雲といった栖鳳の次に京都画壇を担った作家も紹介します。そして学友である土田麦僊や村上華岳といったこの時代を動かした青年画家の熱気を感じてください。また名声を得始めた上村松園の、この時期の代表作も展示します。

第四章「次代への展望」では、光瑠以降に京都画壇を背負って立った、まさに「綺羅星のごとき」日本画家たちの作品を展観します。以上、四つの章を二十二作家三十二作品でご覧いただきます。そして、今回は二階第六展示室に序章「石川と京都」と題した第二会場を設けました。



上村松園《花》 姫路市立美術館蔵



石崎光瑠《花鳥の図》 富山県水墨美術館蔵

第2展示室

石川の文化財

10月6日(金)～11月7日(火) 会期中無休

石川県には、歴史のあるいは芸術的に優れた貴重な文化財が数多く伝えられています。これは、江戸時代に加賀藩主となった前田家の文化的施策が大きな要因の一つとなっており、その歴史的背景を基盤とするところの石川の文化風土は、芸術・文化全般に対する高い関心というかたちで今日に伝わっています。

現在、重要文化財として建造物四十四件、八十二棟、国宝二件を含む美術工芸品八十八件が石川県に所在しています。分野別にみると、絵画九件、彫刻十七件、工芸品二十三件、書籍・典籍二十一件、古文書十件、考古資料八件という内訳です。美術工芸品の数では全国二十一位に相当し、北陸では

富山の三十件、福井の八十一件を上回って最大数を誇っています。建造物も十七位と上位に位置づけられます。

こうした文化財が伝わる理由として、前田育徳会・尊經閣文庫が所蔵する国宝・重要文化財が九十九点にも及ぶことからわかるように、加賀藩主前田家の文化政策が大いに貢献しています。前田家が収集し、育成した数々の名品が、時代を超えて今日に引き継がれているのです。

今回は、第一展示室の《色絵雉香炉》とあわせて白山比咩神社所蔵の《剣 銘吉光》を公開します。本県に現在二件所在する国宝を同時に見ることができるまたとない機会となります。



重文《黒漆螺鈿鈿》 白山比咩神社蔵

1 F 企画展示室

きら 燦めきの日本画

9月23日(土・祝)～10月22日(月) 会期中無休

序章「石川と京都」

石川県の近代日本画を眺めるとき、金沢区工業学校(現在の石川県立工業高等学校)と東京美術学校のパイプ、そして京都画壇との交流を中心としたパイプの二本が重要な役割を担っていたといえます。

序章ではそのうち、垣内雲嶺らによって京都四条派が石川に流入してきた時代、紺谷光俊ら石川から京都へ修行にでた画家たちの様子、そして池田瑞月らによる石川と京都の交流を、当館所蔵品を中心に紹介します。そして、安嶋雨晶や京都の重鎮西山英雄らの作品から、現代につながる京都と石川の時代的な流れもご覧ください。

講演会

「京都画壇」

講師／尾崎眞人氏

(京都市美術館学芸課スーパーバイザー)

九月二十四日(日)十三時三十分

入場無料、申込不要 当館ホール

観覧料

一般 一〇〇〇円(八〇〇円)

大学生 八〇〇円(五〇〇円)

高校生以下 無料

()内は二十名以上の団体割引



木島櫻谷《咆哮》(右隻)

百工比照 I

10月6日(金)～11月7日(火) 会期中無休

学芸員の眼

春季の企画展「よみがえった文化財」では、日本史上屈指の学者大名とも言える前田綱紀による体系的な書物収集と修復が、朱子学の思想に立脚したものであることを確認しました。そして綱紀が編集した「百工比照」にも、朱子学の影響が認められます。朱子学は、あらゆる事物の理を究め、知ることを説きます。そこで動・植・鉱物など自然界に存在するものの博物学的理解の上に、それらを素材として加飾を行う人間の芸術的な活動の根底にある理を追究したのが《百工比照》だったのではないのでしょうか。《百工比照》は加賀藩御細工所工人のための制作見本だったという意見もありますが、作品に残された痕跡を見ると綱紀の最終目的はそこにとどまらず、より学術的なものだったと考えられます。

「百工」とは、諸種の工芸、あるいは工匠の意味であり、「比照」とは比較対照するという意味であることが示すように、《百工比照》は加賀藩五代藩主・前田綱紀が朱子学により動機付けられて編集した工芸の百科事典と行うことができます。

内容は工芸の各分野にわたり、紙類、貼付唐紙類、表紙類、外題紙類、金色類、木之類、蒔絵梨子地塗色類、色漆類、革類、織物類、小紋類、打糸類、竹類、羽織類、旗指物類、甲冑籠手佩楯類、馬具類、繪図、作紋類、巻物軸象牙籤等、染色類、金具類(屏風長持金具・彫金押金・引手・釘隠・取手)などが十一の箱と付属する二つの箱に分類整理されて収められ、総点数は二千点以上にのぼります。これらは各地の産物を購入したものや、詳細な指示をして作らせたもの、また実際に建築に用いられていた金具類などの実物資料と、実物ではなく図示したものや雛形など今日のデザイン見本帳に相当するものとの

二種類に分けられます。いずれも江戸時代前期から中期(十七～十八世紀)にかけての工芸技術の実態を今日に伝える極めて貴重な資料であり、工芸王国石川の象徴ともなっています。

平成二十七年に開催した「加賀前田家 百万石の名宝」展では重要文化財《百工比照》のほぼ全貌を公開しましたが、今回は二期に分けて第一号箱から第三号箱のほぼ全体と、第五、六号箱の主要部分を紹介いたします。各箱の内訳は次のとおりです。

第一号箱…紙類・金色類・木之類・漆類・皮類・

染織類・竹類

第二号箱…陣羽織・武具・紋章類絵図等

第三号箱…金具類

第五号箱…釘隠・引手

第六号箱…七宝釘隠(鳥籠・虫籠・花籠)

第5展示室[工芸]

高橋介州と 加賀象嵌のあゆみ

10月6日(金)～11月7日(火) 会期中無休

明治三十八年、金沢に生まれた高橋介州は、大正十三年、県外派遣実業練習生の第一回生として東京美術学校(現東京藝術大学)の聴講生となります。この時の実習生には他に、漆工の小松芳光や染織の成竹登茂男がいました。高橋は東京で金工家の海野清に師事し、金工を基礎から学びました。昭和四年には金沢市産業課の金属業界指導員になると同時に教師として職に就き、同年第十回帝展に初入選、以来新文展、日展等に旺盛に出品します。十六年には石川県工芸指導所所長に着任し、戦中の厳しい情勢の中、県内の工芸保護に尽力しました。戦後は石川県美術文化協会理事長や当館の前身である石川県美術館の館長をつとめ、県内工芸界をリードしながら、失われつつあった加賀象嵌の技術伝承に刻苦します。五十七年には加賀象嵌で石川県指定無形文化財保持者に認定されました。

高橋の作品は、加賀象嵌の伝統をふまえた平象嵌の端正かつ精緻な仕上げと、無駄のない洗練されたデザインが特徴です。時代に即した伝統の再構築を果たしているといえるでしょう。

本展は平成十六年の逝去から初めての特別陳列です。高橋の作品を約二十点陳列し、そのわざをご覧いただくとともに、石川県の工芸界の指導者としての足跡も振り返りたいと思います。

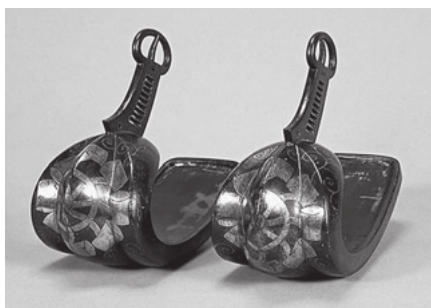
さらに、高橋に師事し、重要無形文化財保持者(人間国宝)となった中川衛をはじめとし、県内で活躍する作家たちの作品もあわせてご紹介します。藩政期から受け継がれつつ、現在もなお展開していく加賀象嵌の魅力を、どうぞお楽しみください。

学芸員の眼

加賀象嵌の始まりは、藩政期の御細工所おさいくしょに遡ると言われています。御細工所は十七世紀初頭に武具等の補修のために組織され、江戸時代を通して各種職人らが藩の御用に応じてわざを磨く場所として発展しました。中でも象嵌を施したあひま鍔あひまは加賀国の名産品として名を馳せ、武家の間で高級贈答品として持てはやされました。

ところが、明治維新によって武家の需要に頼っていた金工業界は大きな打撃を受け、多くの加賀象嵌の職人が廃業を余儀なくされました。加賀象嵌は、輸出品や高級品の製造でなんとか命脈を保ちますが、世界恐慌による不況や続く太平洋戦争に伴う資材制限で、壊滅的な打撃を受けます。

戦後、どんどん消えゆく加賀象嵌のわざは、高橋介州ら作家の奮闘によって今日に伝えられています。



勝国 《銀象嵌水車文鍔 銘加州住勝国作》



高橋介州 《象嵌雉香炉》 石川県七尾美術館蔵 (池田コレクション)

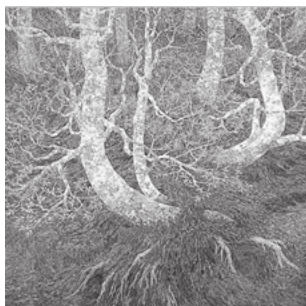
第3・4・6展示室

優品選【近現代絵画・彫刻】

10月6日(金)～11月7日(火) 会期中無休

今回の優品選は写実も含め、ものごと対峙した作品を主体にご覧いただきます。日本画では稲元実の《季節はおわりぬ》、百々俊雅の《夢想》、仁志出龍司の《生》を展示します。稲元の楽しげなメリーゴーランドを描きながら、よき時代の終わりを示唆する暗く波乱を含んだ表現は、新たな一步を踏み出そうとする

示す作品を取り上げ、既成の枠にとられない様々な表現の絵画をご覧ください。一方、「台座から降りた彫刻」は現代彫刻の特徴を指す言葉の一つです。アカデミックな芸術性や権威付けが付与される装置でもある台座から降りることは、鑑賞者の視点と同じ空間に自立することを意味します。そこではアートとしての存在性や社会性、また作品の回りの環境との融合に重点が置かれていくこととなります。展示では現代美術の発展が、見せるために機能した装置やスタイルから脱し、新たな展開への歩みを紹介するものですが、逆説的に作品として存在するための額や台座の意味も改めて問い直してもみるものです。



仁志出龍司《生》

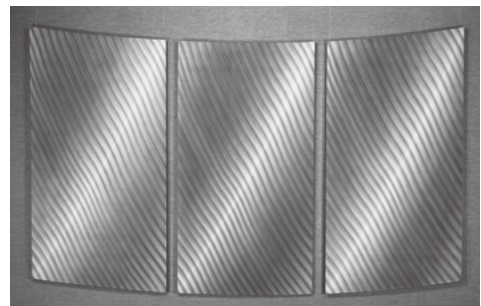
第4展示室

額から出た絵画 台座から降りた彫刻たち

10月6日(金)～11月7日(火) 会期中無休

本展は館蔵品を中心とする絵画・彫刻作品において、新たな表現を試行し、定型から脱して斬新な形状やスタイルを採る作品にスポットを当て、特に絵画作品では既存の額に収めず自由な形を採る作品を、また彫刻では直接、床に置いたり壁に掛ける等、作品の在り方や設置に注目した展示です。さて歴史的に近代絵画を推し進めた側面的な要素の一つに額縁の存在が見えます。ルネッサンス期から絵画はキャンバスへと移行を進めます。テーマやモチーフの多様化とも相俟って、絵画は額を纏うことにより、建築装飾・堂宇荘厳などの固定的な役割から脱し、近代化を進めました。展示では、キャンバス(支持体)に絵の具による描写という既存スタイルから離れ、様々な支持体や塗料・素材を用い、多彩な形状を

画家の決意の表れでしょうか。洋画では鴨居玲の《望郷を歌う(故高英洋に)》、小田根五郎の《ミラノ・ドウオモ》、藤森兼明の《ビザンツへのマドリガル》等をご覧ください。鴨居の《望郷を歌う》は、少年時代をソウルで過ごし、韓国人の友人の多い鴨居が、望郷のアリランを熱唱するイ・スンジャ氏の姿に感銘を受けて描いた作品です。どこかうらぶれた姿を描くことの多い作者には稀な、雄々しく上昇感に溢れた、鴨居の代表作の一つです。彫刻では中村晋也の《ミゼレレVI》等を表示いたします。ミゼレレとは、慈悲を願う祈りを意味します。下げた手を揃えて広げ、つま先立つ若い女性の姿には、神にすべてをゆだねるひたむきで敬虔なおもむきを感じられます。



加藤安佐子《影》

10月前半の展示

8月31日(木)～10月2日(月) 会期中無休

第2展示室

北陸ゆかりの画聖Ⅱ

今回は、久隅守景、岸駒、佐々木泉景の競演という、これまでにない構成となっております。展示点数は少ないですが、いずれの画家にも北陸の地政学的な特質が複雑に反映しています。すなわち、古代からの文化の集積があった北陸地方ですが、京都や江戸との交流、時には緊張関係があったからこそ、その文化土壌から個性豊かな画家を輩出し、あるいは自在に活動する場となったことが今回の展示をおして再認識されます。また今回は、江戸時代の画壇を牽引した狩野派との関係の視点から、これらの画家の代表作を比較してみるのも一興かもしれません。そしていずれもの画家も、文化によって江戸幕府に対抗するとの方針を明確に打ち出した加賀藩の文化政策を自覚して、誇りを持って制作にあたったようです。

前田育徳会尊經閣文庫分館

前田家の名宝Ⅱ

国宝《土佐日記》と重文《劔太刀》など、前田家が収集した珠玉の名宝の展示も会期終盤となりました。今回は《土佐日記》を収めるために加賀藩三代藩主前田利常が清水九兵衛に作らせた《屏風蒔絵箱》もあわせて展示しています。『土佐日記』の内容を暗示するような意匠構成と、それを支える高度な蒔絵の技巧は加賀蒔絵ならではのものです。そのほか雪舟筆と伝えられる重文《四季花鳥図》は、室町時代末期以降の大画面花鳥画の流れを方向付けた様式の典型として改めて注目したい作品です。さらに今回は岸駒の《松下飲虎図》も展示しています。こちらは岸駒の「越前介」時代を代表する作品として、第二展示室で開催中の「北陸ゆかりの画聖Ⅱ」で展示している県文《虎図》と比較してご覧いただきたいと思えます。

10月の行事予定

15日(日)	「日本画の伝統と変革」25分 「日本の巨匠シリーズ 上山松篁」15分 「日本の巨匠シリーズ 西山英雄」15分
1日(日)	「日本の美10 光と影」28分 「洋画と日本画 日本近代美術の出発」25分
14日(土)	加賀象嵌と高橋介州 中澤菜見子 学芸員
■映像ギャラリー	午後1時30分～ 美術館ホール 入場無料
■土曜講座	午後1時30分～ 美術館講義室 聴講無料
21日(土)	午前9時30分～11時30分
9日(月・祝)	午後1時～3時
■展示室でスケッチGO!	申込不要、当日受付

秋のミュージアムウィーク

兼六園周辺文化の森では十月十五日(日)から十一月五日(日)まで「秋のミュージアムウィーク」として、さまざまなイベントが行われます。

◆いしかわ文化の日

十月十五日(日)は石川県民の方は当館コレクション展を無料でご覧いただけます

◆映像でみる石川の工芸作家

日 時 十月十七日(火)～十九日(木) 午後一時三十分～
会場 県立美術館ホール、申込不要、入場無料

◆伝統工芸制作体験ワークショップ「金沢箔でオリジナル菓子皿を作ろう」

日 時 十月二十一日(土)①午後二時～三時、②午後三時～四時
会場 県立美術館講義室、定員は各回先着十五名、要申込

参加費 千円
申込は県文化振興課(〇七六一二二五―一三七二)

《私を捨てないで》わたしをすてないで 乾漆

高67.5×幅143.0×奥行92.0(cm) 昭和40年(1965)第19回二紀展

堀 義雄 ほり・よしお

大正6～平成28年(1917～2016)



「えっ」と、思わず見返してしまいそうなタイトルのこの作品は、形もユニークで、何かの入れ物のような袋状の造作に所々管の跡のようなものが付くという黒々とした大きな塊で、艶消しの漆の質感とフォルムが融合し一見、呪術的な雰囲気すら漂わせています。作品は素地に漆を塗り重ねて形を作り出す乾漆技法によるものです。

作家は石膏や竹籠を軀胎・芯として、その上に漆を厚く塗り重ねて形を作ります。作品には大胆に穴や切り込みを空け、円い外側の形で内部の小世界を包み込む独自の形状は、乾漆という素材・技法の特徴を生かしています。なお本品は単色ですが、多くの作品では、作品表面を黒と赤漆に塗り分け、まるで生き物や内蔵の一部のような有機的形狀に赤と黒の色彩が対比する不思議な、また劇場的な空間を創出、さらに意外性あるタイトルが相乗して独特の世界を展開しました。

作家は、人間本来の姿・自然な姿への回帰を唱え、タブーとされがちな生殖器等をモチーフの一部とする作品も制作、人の情念や本能にも真摯に目を向け、人間本来の在り方や生命感の意味を問い、その根源に肉迫する造形を展開しました。

作家は金沢市出身。多摩帝国美術学校卒業。吉田三郎に師事し、昭和二十四年日展初入選。昭和三十一年以降、二紀会に出品。二紀会評議員を勤めました。戦後一時期、金沢市内で教員として勤務しましたが、埼玉県川口市に移住し、作家活動に専念しました。特集「額から出た絵画・台座から降りた彫刻たち」に出品

次回の展覧会

平成29年11月11日(土)
～12月17日(日)

前田育徳会 尊経閣文庫分館		第2展示室	
百工比照Ⅱ		加賀時絵の世界	
第3・4展示室	第5展示室	第6展示室	1F企画展示室
優品選 【近現代絵画・彫刻】	東京国立近代美術館 工芸館名品展 陶磁いろいろ	棚の美 【工芸】	第64回 日本伝統工芸展金沢展 10月27日(金) ～11月5日(日)

ご利用案内

コレクション展観覧料
一般 360円(290円)
大学生 290円(230円)
高校生以下 無料
※()内は団体料金
毎月第1月曜日はコレクション
展示室無料の日(10月は3日)

今月の開館時間
午前9:30～午後6:00

カフェ営業時間
午前10:00～午後7:00 年中無休

10月は無休で開館しています

石川県立美術館だより
第408号(毎月発行)
2017年10月1日発行
〒920-0963
金沢市出羽町2番1号
Tel: 076(231)7580
Fax: 076(224)9550
URL <http://www.ishibi.pref.ishikawa.jp/>

ガン保険

チューリッヒ生命「終身がん治療保険プレミアム」

通院治療が増加している時代の、
画期的なガン保険

既にガン保険にご加入されている方に

●主契約：放射線治療給付金、抗がん剤・ホルモン剤治療給付金(給付月額20万円)

●保険期間：保険料払込期間：終身

月払保険料 **1,500円** (35歳男性) / **1,500円** (43歳女性)

追加のご加入で、ガンの通院治療の保障を充実

●主契約：放射線治療給付金、抗がん剤・ホルモン剤治療給付金(給付月額20万円)

●特約：ガン先進医療給付金、ガン先進医療支援給付金(一括15万円)、ガン診断給付金(一括50万円)、悪性新生物保険料払込免除

●保険期間：保険料払込期間：終身

月払保険料 **3,216円** (40歳男性)

今、ガン保険にご加入されている方も、
ご加入されていない方も今すぐチェック!

0037-6001-61023

ZURICH 株式会社エリート・フィナンシャル・コンサルティング

〒190-0022 東京都新宿区新宿5-17-18

※記載の保険料は2015年7月現在のものです。※この欄は商品の概要を説明しています。商品の詳細については、パンフレット、ご契約に関する注意事項(契約概要、注意喚起情報)等をご確認ください。